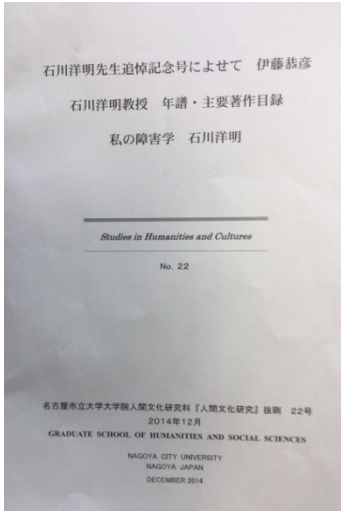
石川さん「追悼記念号」

写真のように、石川洋明さん「追悼記念号」が『人間文化研究』22 号の抜刷として刊行された。吉田一彦さん作成の年譜・主要著作目録から、石川さんの研究の歩みなどを知ることができる。数多くの学会発表や研究報告をしており、論文もベースに研究の成果を単著にまとめたかったであろう。まだ若いのに残念だ。


石川洋明先生追悼記念号によせて　伊藤恭彦

石川洋明教授　年譜・主要著作目録

私の障害学　石川洋明

Studies in Humanities and Cultures

No. 22

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷　22号
2014年12月
GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES
NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN
DECEMBER 2014

石川さんの遺稿として「私の障害学」が掲載されている。お通夜のときに、吉田さんと話題にしたことを思い出す。本稿の初校は、赤が入らないまま残されていた。「先生ご自身の手で加筆・修正はかないませんでした。---　石川洋明先生の最後の貴重な作品ですので、発表させていただくこととします」と、伊藤恭彦研究科長が冒頭に書いている。

遺稿を紹介しよう。「本稿では、私が障害を得て、その後の生活の中で感じたことを整理し、若干の分析を加えたいと思う。ただし、私の経験や分析が新しい発見につながっているかについては心もとなく、学術的価値が大きいかどうかも自信はない。『私の障害学』といういささかエッセイ風の題名も、そのあたりの事情（心情）を反映している。しかし、この間の体験は、私にとってたいへんリアルなものであり、かつて勉強したいくつかのことが目の前にあらわれ、『ああ、あれはこんな感じなのか』と感得させられたり、新しい体験に『へぇ〜、こんなことがあるんだ』と感心したりするのに十分なインパクトをもっていた。それをぜひ伝えたくて、本稿を書くことにした。」

こうした書き出しのあと、「障害者になる」「自立について」「世間の見方」「『構造』について」「初めて気づく『障害者の多様性』」に続く。

なんと言っても、石川さんの車椅子生活の体験談と辛口コメントが心に響く。石川さんは地下鉄の御器所駅で乗り換え、大学まで車椅子で通った。駅員さんの用意したスロープの話、エレベーターの乗り降りの話など、彼らしいエピソードを含めて、社会学者として問題点を鋭く指摘している。最後のところで次のように述べている。「正直に言うが、自分が障害者になって初めて、障害者も多様である、ということが（少し）腑に落ちた。 ---　私自身は自分が障害を得ることで、この世界をはからずも体験し、障害という経験の一端を知ることができた。これはまだまだ限られたものだと思うが、せっかくなので目一杯体験し、人に伝えていきたいと思う。」

この「遺稿」により、石川さんの「意向」を理解できた。「追悼記念号」に感謝したい。

（2015 年 3 月 6 日）